



アジア子ども基金
(ACF JAPAN)

ネパールの村に バイオガスと乳牛を

首都カトマンズ北部にあるヌアコット郡カカニ地区。今ここで、貧困家庭を救うためのマイクロクレジット事業が進められている。NGOアジア子ども基金(ACF JAPAN)が支援する、乳牛やバイオガス装置を普及するための取り組みだ。

マイクロクレジット事業を 真の貧困対策に

2007年、ヌアコット郡カカニ地区で暮らす友人宅を訪れたアジア子ども基金(ACF JAPAN)代表の鈴木まさこさんは、ある意外な発見をした。

「そのお宅ではガスで調理していたんです。驚きました。カカニ地区は電気もなく、薪で煮炊きするのが普通だと思っていましたから。なぜ、みんなは使わないの?と聞いてみたくて」

鈴木さんが発見したガスは、牛糞や人糞をタンク内で発酵させメタンガスを発生させる「バイオガス装置」によるものだった。ガスは炊事や暖房に使える。

しかし、友人の答えは「高価すぎて、みんなが設置するのは難しい」だった。カカニ地区には、現金収入がほとんどない貧困家庭が多い。バイオガス装置の敷設がネパール政府に推奨されているとはい

バイオガスと乳牛が もたらす恩恵は大きい

開始に先立って、ACF JAPANは、現地NGO、ACF NEPALを設立、融資の対象となる組合の選定などを任せている。信頼できる農村組合を選ぶには、現地の人の目が一番だからだ。また、ACF NEPALのスタッフは、実際に組合員宅を訪問し、バイオガス装置の設置や乳牛の飼育が可能かどうか確認する。また、乳牛の選定は組合に一任されるが、買い付けにはスタッフが同行。融資を確実に貧困層に届け、効果を上げるための工夫だ。

この事業では、組合へは無担保・利息3%で融資され、組合から組合員へは利息6%で貸し付けられる。今回JICA基金を活用し、バイオガス装置8基と乳牛8頭分の資金が4つの組合に融資さ



バイオガス装置の設置方法について説明を受ける夫婦(左)。地中に岩盤がないこと、南向きであることなど、場所の選定に当たってスタッフ(中央)は何度も足を運ぶ



バイオガス装置を設置した家庭。トイレからこの装置に流された糞を水と混ぜてガスを発生させる



(上)購入した乳牛をトラックから降ろし、農家に運ぶACF NEPALのスタッフ。言うことを聞かず、暴れ出すこともある乳牛の扱いは慣れた人でないと難しい
(下)バイオガス装置の設置にはトイレが必要。それにより、人々の衛生状態も改善しつつある

れ、最貧農家や障害者家庭、寡婦家庭を優先して選ばれた貸付対象の組合員は約300家族のうち16家族に上った。しかも、牛小屋の無償提供や返済期間の延長といった特典付きだ。

こうした取り組みは、さまざまなところで効果を上げている。「薪を取りに行く回数が減って、その分、イチゴの収穫量が増えた」と語るのは、バイオガス装置を設置したビルマヤさん。バイオガスを利用することで、これまで使っていた薪を用いるかまどは不要となる。薪集めの重労働からも解放され、これまで以上に農作業に時間が割けるといふわけだ。樹木の伐採もなくなるので、山野の荒廃も止められる。

また、バイオガス装置の設置には屋内トイレの併設が必要。もともとカカニ地区の78%の家庭にトイレがなかったが、設置すれば、安全な飲料水の確保や下痢の軽減、感染症の防止にもつながる。さらに、ガスを分離した後に残る液体が良質の液体肥料になり、有機農業に取り組みムスダムさんは積極的にこの液肥を利用している。

「ミルクを販売して、息子を高校へやることができました」と喜ぶのは乳牛を購入したチルママさん。1頭分の糞で5人家族の1日の炊事が賄えるほどのエネルギーを提供してくれる乳牛は、現金収入を得る。即戦力ともなっている。

しかし課題もある。「バイオガスは現金収入につながるが」「乳牛は世話が大変すぎる。肉として売ってしまいたい」という声も聞かれる。かつて、ネパールでの孤児院建設に失敗した経験を持つ鈴木さんは、現地の人々とのコミュニケーションを何よりも心がけている。こうした地域の人からの声は、今後の事業をより良いものとするための貴重な指針だ。

「何をしたいのか、こちらは何ができるのか、とことん話し合いながら、現地の人と私たちとが補い合って活動していくことが何よりも大切です」

孤児たちの寂しく悲しそうな目が今も忘れられない鈴木さん。孤児を生む背景となつている貧困の削減は、未来の孤児たちを救うことでもある。マイクロクレジット事業を進めながら、鈴木さんは今、カカニ地区の人々に思いを寄せ、その声に静かに耳を傾けている。

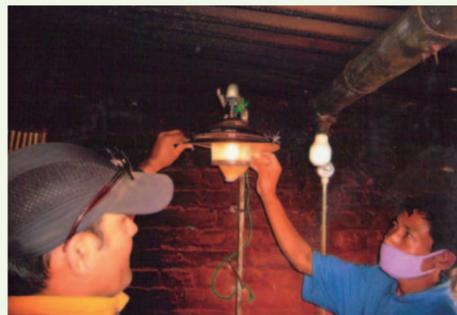
え、ここでは高嶺の花。一般家庭に普及させるのは難しい状況だった。

そこでACF JAPANは、貧困家庭にお金を低利で貸し付けるマイクロクレジット事業を通じて、バイオガス装置の普及を支援することに。住民の相互扶助組織である農村組合に融資し、その資金を組合員である住民が装置の購入に充てるのだ。

しかし、その試みは「まだまだ甘かった」と鈴木さんは語る。バイオガスの原料となる糞を提供してくれるのは、乳牛や水牛だ。だが、乳牛や水牛を所有できるのは、比較的富裕な家庭。バイオガス装置だけを対象にしては決して貧困家庭の救済にはならない。

現地の人々にそう指摘された鈴木さんたちは、バイオガス装置に加え、乳牛の購入も融資の対象にした。そして、この原資の一部にJICA基金を活用し、09年、ようやく本場の貧困対策がスタートした。

女性や子どもの仕事だった薪拾い。バイオガス装置の設置で、彼女たちはこの重労働から解放された



夜間、部屋に明かりをともせるようになった

あなたの小さな一歩から始まる国際協力 世界の人びとのためのJICA基金

JICAでは、国際協力に関心のある日本の皆さまからの寄付を、開発途上国の貧困削減や環境保全への取り組みに活用する「世界の人びとのためのJICA基金」で受け付けています。皆さまの支援をお待ちしております。

寄付金の使われ方

お寄せいただいた寄付金は、途上国の貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組むNGOの活動に充てられます。各支援活動や寄付金事業収支についてのご報告は、「JICA寄付サイト」で公表します。

寄付の方法

「JICA寄付サイト」からお申し込み下さい。クレジットカードによる決済や、銀行・郵便振込みなどおしいいただけます。
JICA寄付サイトURL: <http://www.kifu.jica.go.jp/>



「アジア子ども基金」へのお問い合わせはこちら
〒507-0063岐阜県多治見市松坂町4-8-82
TEL: 0574-64-2214
Email: mumin1108@sf.commufa.jp
URL: <http://acfjapan.greater.jp/>